

## 第二章 光る源氏の物語 夏の長雨と鬱屈の物語

### [第一段 須磨の住居]

おはすべき所は(源氏が須磨でお住まいになる所は)、\*行平の中納言の、「藻塩垂れつつ(塩造りの海藻から海水が垂れる様に涙を零しながら)」侘びける家居(と歌に詠んで侘び住まいした家の)近きわたりなりけり(近く辺りでした)。\*「行平の中納言」は在原行平(ありはらのゆきひら)で、伊勢物語の主人公とされる在原業平(なりひら)の兄である。といっても私は伊勢物語を読んだ事は無いが。一族は桓武天皇の嫡流だったが、政変で臣籍降下したという。ただし行平は中納言にまで出世し、業平共々歌人としても名を残しているので、必ずしも悲運だけの人というわけでは無さそうだ。確かに「藻塩垂れつつ」の歌は須磨での謹慎中の作ではあるらしく、巻頭で源氏が須磨行きを決心した件の注釈でも既に見た歌だが、行平は後日に中央復帰して出世しており、その復権を踏まえて引き合いに出されたのだろう。

海づらはやや入りて、あはれにすごげなる山中なり(海辺からは少し入った、物寂しい山の中です)。垣のさまよりはじめて(垣根の様子からして)、めづらかに見たまふ(源氏は物珍しく御覧になります)。茅屋ども(カヤ葺き屋根の家屋を)、葦葺ける廊めく屋など(葺き屋根の回廊で繋げた)、をかしうしつらひなしたり(面白い造りでした)。所につけたる御住まひ(土地柄に即した住居が)、やう変はりて(風変わりで)、「かからぬ折ならば(謹慎で無ければ)、をかしうもありなまし(風流とも思えたが)」と、昔の御心のすさび思し出づ(かつての遊び歩きを思い出されます)。

近き所々の(近隣所領地の)御荘の司(みしゃうにつかさ、荘園の管理人を)召して(呼び寄せて)、さるべきことどもなど(当住居の整備などを)、良清朝臣(よしきよのあそん、良家の子息たる良清が)、親しき(源氏の側仕えの)家司にて(けいしにて、家の管理者として)、仰せ行なふもあはれなり(指図の実務を行うというのも情けないものでした)。

時の間に(しかし短期間のうちに)、いと見所ありてしなさせたまふ(とても趣ある別荘に仕立てさせなさいました)。水深う遣りなし(庭に池や曲水を配し)、植木どもなどして(木々を植えて)、今はと静まりたまふ心地(すっかり落ち着いた風情は)、うつつならず(世俗の喧騒とは一線を隔していたのです)。国の守も(また摂津の守も)親しき殿人なれば(源氏の見知った家来筋で)、忍びて心寄せ仕うまつる(表立ってではないが何かと便宜を図って源氏の暮らしを助けました)。

かかる旅所ともなう(こうして、かかる仮宿らしくもなく)、人騒がしけれども(人の出入りは多かったのですが)、はかばかしう物をもものたまひあはすべき人しなければ(気心の知れた話し相手という者が居ないので)、知らぬ国の心地して(やはり見知らぬ他国に居る気がして)、いと埋れいたく(源氏はさっぱり気が晴れず)、「いかで年月を過ぐさまし(この先如何して暮らしたものでやら)」と思しやらる(と思ひ遣られました)。

### [第二段 京の人々へ手紙]

やうやう事静まりゆくに(次第に事が落ち着いて行くと)、長雨のころになりて(梅雨の頃となって)、京のことも思しやらるるに(京の事を御考えになると)、恋しき人多く(恋しい人が沢山居

て)、女君の思したりしさま(若妻の悲しんでいた姿や)、春宮の御事、若君の何心もなく紛れたまひしなどをはじめ(若君が無邪気にはしゃいで居らした事などを初め)、ここかしこ思ひやりきこえたまふ(その他に何人もの女を思い描いて御出ででした)。

京へ人出だし立てたまふ(源氏は京に遣いを差し向けなさいます)。二条院へたてまつりたまふと(留守を守る妻に差し上げる文と)、入道の宮のとは(入信なさった春宮の母宮への文は)、書きもやりたまはず(うまく筆が進まず)、昏されたまへり(苦心なさいました)。宮には、

「松島の海人の苦屋もいかならむ、須磨の浦人しほたるるころ (和歌 12-20)

「ボロ屋暮らしは如何ですか、こっちはただ泣き暮れてます (意識 12-20)

\*注に<源氏から藤壺への贈歌。「松島」に「待つ」を掛け、「海人」に「尼」を掛ける。「賢木」巻の贈答歌を踏まえた表現。>とある。そう言えば「あま」連なかりで「松が浦島」を詠み込んだ歌を源氏と中宮が交わした事があった。今年の正月に、出家してさっぱり参賀の来客が途絶えた中宮の三条邸を源氏が訪ねた時の事。賑わいを失くした未だ肌寒い初春の庭先を見て源氏が、「ながめかる(長布刈る、海藻採りの)あまのすみかと(海人の棲家と)みるからに(見るからに其れらしく粗末な)まづしほたるる(先づ潮垂るる、どうにも湿っぽい)まつがうらしま(待つが裏島、待ち人の来ない離れ屋)」(和歌 10-30)、と其の寂れた様子を親しげに軽口めかして詠み上げた。ただし其の歌の本意は「眺めかる尼の住処と見るからに先づ枝折垂るる松が浦島(物思いに沈みがちな尼上の御住まいに相応しく、配した松さえ遠慮がちに折れ垂れた枝振りの見事な庭です)」と宮に同情し、むしろ庭の清清しさを愛でていた。相当に練り込んだ心憎い歌である。そして宮も、「ありし世のなごりだになき浦島に立ち寄る波のめづらしきかなく宴の後の浦島に御客様とは愛ずらしい>」(和歌 10-31)、と興に乗って応えていた。この和みを懐かしんで当歌は詠まれている。なので「松島の海人」は<宮>のこと。「苦屋(とまや)」はムシロ囲いの粗末な家で、海人の休憩所といった所か。「須磨の浦人(うらびと)」は<源氏>のこと。「潮垂るる」は服や枯れ枝が潮水に濡れて滴が垂れることで、涙で袖が濡れる事に通じる。したがって歌の大意は「其方のあばら家は変わり在りませんか、私は海辺で泣き暮らしています」という挨拶文になる。しかし、この歌は意味そのものよりも軽口めかした言い回しが許される親しみこそが味わいなのだろう。

いつとはべらぬなかにも(特に何時という事も無く)、来し方行く先かきくらし(過去も未来も暗く思えて)、『\*汀優りて(みぎはまさりて、涙があふれて)』なむ(来ます) \*「汀優りて」は水際に波が迫ってくる様で、水嵩が増してくる事から涙が止め処無く流れる事を表す言い方、との事(古語辞典)。

尚侍の御もとに(ないしのかみのおんもとに)、例の(例によって側女房の)、中納言の君の私事(わたくしごと、家の者からの雑事の知らせ)のやうにて(の様に外封筒を装って)、中なるに(その中に源氏は手紙を忍ばせなさって)、「つれづれと過ぎにし方の思うたまへ出でらるるにつけても(あれこれと昔の事が思い出されて来ますが)、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを、塩焼く海人やいかが思はむ」(和歌 12-21)

須磨まで流れて来た挙句、懲りずまに燃やす恋心」(意識 12-21)

\*注に<源氏の朧月夜への贈歌。「懲りずまに」に「須磨」を掛け、「海松布(みるめ)」に「見る目」を掛ける。『奥入』は「白波は立ち騒ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ」(古今六帖三、みるめ)を引歌として指摘する。>とある。必脚である。当歌は、この引歌の通りの事を「ゆかしきを(実現したいと)」「塩焼く海人や(私はその潮時を窺がっていますが)」「いかが思はむ(貴女は如何お思いでしょうか)」、という誘い文句に他ならない。引歌の表面は「浪が立って厄介でも須磨の内海の手松布は収穫したい」だが、本意は「周囲が反対しても懲りずに瑞々しい美る女は抱きたい」という事で、当歌はだから何とか会いたいと言っている、のだろう。

\*さまざま書き尽くしたまふ言の葉、思ひやるべし(こんな調子ですから他に何が書かれていたかは大体ご想像が付くと存知ます)。\*注に<語り手のあとは読者の推量に任すという省筆の弁。『岷江入楚』所引三光院実枝は「草子の地なり」と指摘。>とある。

大殿にも(岳父邸にも)、宰相の乳母にも(若君の乳母の宰相の君に宛てて)、仕うまつるべきことなど書きつかはす(養育上の注意などを書き遣しなさいました)。

京には(京では)、この御文(源氏が遣いに立てたこの時の御手紙を)、所々に見たまひつつ(其々の宛先で御覧になっては)、御心乱れたまふ人びとのみ多かり(お心を痛める人々ばかりでした)。二条院の君は、そのままに起きも上がりたまはず(御手紙を読んだきり起き上がることもお出来に為れず)、尽きせぬさまに思しこがるれば(ただもう悲しみに暮れて居らしたので)、さぶらふ人びともこしらへわびつつ(側仕えの女房たちも宥めかねて)、心細う思ひあへり(心配し合っていました)。

もてならしたまひし御調度ども(源氏が使い慣れて居らした手回り品や)、弾きならしたまひし御琴(弾き慣れて居らした御琴)、脱ぎ捨てたまへる御衣の匂ひなどにつけても(御召になっていた着物の残り香などを)、今はと世になからむ人のやうにのみ思したれば(二条院の君は今は亡き人の形見のように愛しんで居らしたのが)、かつはゆゆしうて(穏やかでは無いほどに感じられたので)、少納言は(古女房の少納言は)、僧都に御祈りのことなど聞こゆ(夫人の祖母の兄である北山の僧都に御祈祷の事などを相談しました)。

二方に御修法などせさせたまふ(僧都は源氏と夫人の二方の為に護摩焚きを執り行わせなさいました)。かつは(夫人については)、「思し嘆く御心静めたまひて(お嘆きを鎮め下さり)、思ひなき世にあらせたまつりたまへ(心配の無い世にして下さい)」と、心苦しきままに祈り申したまふ(救いを求めて念じ申しなさいました)。

旅の御宿直物(おんとのいもの、寝具類)など、調じてたてまつりたまふ(夫人は揃えて須磨に送りなさいます)。\*かとり御直衣(固い織りで夏用の薄着や)、指貫(さしぬき、裾閉じ袴で)、さま変はりたる心地するもいみじきに(源氏がすっかり変わった御姿に成る様に思えて)、「去らぬ鏡(せめて鏡に姿を残そう)」とのたまひし面影の(と仰っていた出発前の面影を)、げに身に添ひたまへるもかひなし(今更思い出してみても遣り切れませんでした)。\*「かとり」は<目を緻密(ちみつ)に固く織った平織りの絹布。かとりぎぬ。>と大辞泉にある。入梅時期の事なので「夏物の薄着」を用意したのだろう。「なほし・さしぬき」の平服は源氏のような特権階級であれば、御所内でも礼服御免で許されていたろうし、「かとり」自体が粗末なもので有ろう筈も無いが、「さま変はりたる心地するもいみじきに」とあるのは、単に衣

替えの季節感に時間経過を恨めしく覚えた事だけでも思えないので、謹慎の身の源氏が御所仕えの時の華やかさとは打って変わった地味な装いだっらしい事は窺える。

出で入りたまひし方(源氏が出入りなさっていた戸口や)、寄りゐたまひし(寄りかかって居らした)真木柱(まきばしら、檜柱)などを見たまふにも、胸のみふたがりて(紫の上は胸が塞がるばかりで)、ものをとかう思ひめぐらし(物の道理を弁えて)、世にしほじみぬる齡の人だにあり(世情に浸り込んだ経験豊富な年配の人ならともかく)、まして、馴れむつびきこえ(幼い時から親しんで)、父母にもなりて(父母にも成り代わって)生ほし立てならはしたまへれば(育て上げてられて居らしたので)、恋しう思ひきこえたまへる(恋しく思い申し上げるのは)、ことわりなり(当然の事でした)。

ひたすら世になくなりなむは(本当に亡くなってしまったのなら)、言はむ方なくて(考える余地は無いので)、やうやう忘れ草も生ひやすらむ(次第に忘れ草が育って気持ちが落ち着いて来るものだが)、聞くほどは近けれど(連絡は取りやすいものの)、いつまでと限りある御別れにもあらで(何時までと決まった別離では無いので)、思すに尽きせずなむ(夫人の悩みは尽きなかったのです)。

入道宮にも(にふだうのみやにも、三条の尼宮に於かれても)、春宮の御事により(世話役の源氏の失脚で即位に差障りが有りはしまいかと)思し嘆くさま(御心配になること)、いとさらなり(殊更でした)。御宿世のほどを思すには(春宮出生の前世での廻り合わせを御考えになれば)、いかが浅く思されむ(尼宮が源氏をどうして浅い因縁と御思いに為るでしょう)。年ごろはただ(これまでは偏に)ものの聞こえなどのつつましさに(世間の噂を憚って)、「すこし情けあるけしき見せば(少しでも源氏に気がある素振りをすれば)、それにつけて人のとがめ出づることもこそ(そのことで大后側から責められ兼ねない)」とのみ(とばかり案じて)、ひとへに思し忍びつつ(頑なに思いを押し殺して)、あはれをも多う御覧じ過ぐし(源氏の多くの誘いを振り切って)、すくすくしうもてなしたまひしを(刺々しい態度をとって来たが、結局は其れが幸いして)、「かばかり憂き世の人言なれど(とかく悪い噂を立てる世間だが)、かけてもこの方には(少しも春宮の出生については)言ひ出づることなくて止みぬるばかりの(疑われること無く済んで来たので)、人の御おもむけも、あながちなりし(源氏の如何にも強引だった)心の引く方にまかせず(恋心に釣られる事無く居た)、かつはめやすく(自分の方の自制で無難に)もて隠しつるぞかし(隔し遂せて来たに違いない)」。あはれに恋しうも(そう思えば犠牲にした恋心の大きさが逆に俣ばれて)、いかが思し出でざらむ(如何して愛しく思い出さずに居られましょうか)。

御返りも(そこで、さすがに此の度の尼宮の御返事は)、すこしこまやかにて(少し思い遣りが深く次のように有りました)、「このころは、いとど(近頃は益々)、

塩垂るることをやくにて松島に、年ふる海人も嘆きをぞつむ」(和歌 12-22)

あなたの仕事を手伝うと、煙で涙が止まりません」(意識 12-22)

\*注に<藤壺の返歌。「役」と「焼く」、「松島」の「まつ」に「待つ」、「海人」と「尼」、「嘆き」と「投げ木」を掛ける。「投げ木」とは「積む」の縁語。>とある。「松島」が源氏と宮とに通じる隠語で<寂れた三条邸>であ

る事は既に見た。その「松島に」居る「年ふる(年老いた)海人」は尼宮である。ところで源氏の贈歌は「松島の海人の苦屋もいかならむ須磨の浦人しはたるるころ」(和歌 12-20)だから、当歌で「塩垂るる」のは源氏である。その煮詰める釜を焚く為に宮が薪をくべる。したがって当歌の中では、尼宮が源氏の塩焼き作業を手伝っている、という思い遣りのある絵が見える。「泣くのを仕事にしたように繰言ばかりで歳を取る」というB面も然り乍ら、「あなたの塩焼き釜を焚く為に此方でも昔ながらに薪を積んで用意しています」というA面にこそ然ぞや源氏は痺れたことだろう。

尚侍君(かんのきみ)の御返りには(そして六姫からの御返事には)、

「浦にたく海人だにつつむ恋なれば、くゆる煙よ行く方ぞなき (和歌 12-23)

「藪から棒に聞かれても、とても応えは覚束ない (意識 12-23)

\*注に「海人だに」と「数多に」、「恋」の「こひ」に「火」、「燻ゆる」に「悔ゆる」を掛ける。>とある。当歌の表面は「海辺で焚く塩焼きの火さえ包み隠すのだから煙の行き場は在りません」だが、是は返歌なので何かの応えである。源氏の贈歌は「こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼く海人やいかが思はむ」(和歌 12-21)ということで、詰まりは「何とか会う算段は付きませんか」と聞いて来ていた。しかし、その聞き方は侍女の中納言の君宛の中に思いを「数多に包む」で遣すと言う小賢しさだった。六姫は源氏に「こんな小細工を弄さなければ御聞きに出来ないお尋ねには御答えのしようも有りません」と監視の厳しさを知らせたのだろう。

さらなることどもは(そこから先の事などは)、えなむ(まして)」とばかり、いささか書いて(とだけ短く書いて在る返歌が)、中納言の君の中にあり(中納言の君からの返信の中に隠されていたのです)。

思し嘆くさまなど、いみじう言ひたり(その返信の中で侍女の中納言は源氏に六姫が悲しんでいる様子を頻りに訴えて来ていました)。あはれと思ひきこえたまふ節々もあれば(源氏は、ああそうか、と思ひ当たりなさる事々が在って)、うち泣かれたまひぬ(独り涙に暮れました)。

姫君の御文は(二条院の若妻のお手紙は)、心ことにこまかなりし(心を砕いた配慮の行き届いた、情が特に細やかな)御返りなれば(御返事だったので)、あはれなること多くて(源氏も感じ入る事が多くて)、

「浦人の潮くむ袖に比べ見よ、波路へだつる夜の衣を」(和歌 12-24)

「独り都に残されて、浪が無くても濡れる袖」(意識 12-24)

ものの色(と言って送られて来た寝間着や寝具類の色や)、したまへるさまなど(仕立て具合などは)、いときよらなり(とても見事なものでした)。

何ごともらうらうじうものしたまふを(夫人が何事にも行き届いて御出でなのが)、思ふさまにて(理想的だったので)、「今は(今の須磨での侘び暮らしなら)他事(ことごと、他の女)に心あわたたしう(に気を取られて)、行きかかづらふ方もなく(通い付ける所も無く)、しめやかにてあるべきものを(落ち着いて暮らして居られるものを)」と思すに(と御考えになると)、いみじう口惜

しう(都へ夫人を残してきた事が源氏は何とも残念で)、夜昼面影におぼえて(夜昼と無く御顔を思い出さなさは)、堪へがたう思ひ出でられたまへば(我慢出来ない気持ちに御成りに為って)、**「なほ忍びてや迎へまし(やはり世間に隠れてでも呼び寄せてしまおうか)」**と思す(と御思いに為ります)。

またうち返し(でも直ぐに思いなおして)、**「\*なぞや(否、其れは出来ない)、かく憂き世に(この劣勢の時に)、罪をだに失はむ(嫌疑を晴らすことが先決だ)」**と思せば(と御思いに為って)、やがて御精進にて(そのまま修行生活に入られて)、明け暮れ行なひておはす(明け方と暮れ方に読経をお上げに為って御出ででした)。\*此処の文については注に<源氏の心中。『完訳』は「せめて仏罰だけでも消滅させよう。無実の謫居生活に、藤壺と深くかかわらねばならなかった罪業を贖おうとする」と注す。>とある。「謫居(たくきよ)」は<罪によって、自宅に引きこもったり、遠くの土地へ流されたりしていること。また、その地の住居。(大辞泉)>とある。ただ少し屁理屈を言えば、母子姦淫を罪だとすると春宮は罪を背負って生きなければ為らない。しかし出自自体が罪なので、生ある限りは償えない。故に決して春宮は救われない。それでも救いを求める源氏が望むのは存在自体の承認であり、其の為の因果の御祓いであり宿世の御清めなのである。それは「贖罪の意識」というより、「免罪符の奪取」に思えてならない。というのも、此処までの記述で私が受ける印象は、源氏が基本的には之の事態を権力抗争と見ていて、今は劣勢だが何時か時を得て挽回する日まで、じっと耐えようとしている姿である。その耐久生活を凌ぐ方法のひとつが念仏行なのであって、源氏もしくは作者は、本質的に念仏自体には「信頼」や「期待」などは寄せていない気がする。詰まり源氏は須磨で<運が向くのを待っている>ので、此処の文は、源氏の仏心を殊更に否定するものではないが、夫人を呼び寄せるのを自制した明らかな理由としては、余計な波風を立てたくないから謹慎した、という意味の文章表現かと思う。其の配慮が結果として、女を絶った修行を成立させた、という書き方になるのだろう。大上段に構えて律する記述よりも、悩みながら事を成就させたような書き方の方が説得力が在る、ということなのかも知れない。

大殿の若君の御事などあるにも(宰相の君から岳父邸に居る若君の様子を知らせて来たりもしたが)、いと悲しけれど(それは気掛かりだったが)、**「おのづから逢ひ見てむ(何れまた会えるだろう)。頼もしき人々ものしたまへば(頼もしい祖父母が居るのだから)、うしろめたうはあらず(心配ないだろう)」**と、思しなさるは(御思いに為ったりするのは)、なかなか(意外と)、子の道の惑はれぬ(我が子可愛さに理性を失くすような親馬鹿ぶり)にやあらむ(というわけでもなさそうでした)。

### [第三段 伊勢の御息所へ手紙]

まことや(いや是は)、騒がしかりしほどの紛れに漏らしてけり(須磨下向の慌しさに紛れて書き漏らしていました)。かの伊勢の宮へも(伊勢の宮に同行された御息所の許にも)御使(おんつかひ、一角の使者に手紙を持たせて)ありけり(あったのです)。かれよりも(先方からも)、振延へ(ふりはへ、わざわざ)尋ね参れり(御返事を持った側近の使者が遣ってきました)。浅からぬことども書きたまへり(有り触れた御挨拶では御座いませんでした)。言の葉(文言や)、筆づかひなどは(字の美しさは)、人よりことになまめかしく(誰と比べても優雅で)、いたり深う見えたり(教養深く見えました)。

「なほうつつとは思ひたまへられぬ(とても信じられない)御住ひをうけたまはるも(須磨での隠棲を御聞き致しましても)、明けぬ夜の心惑ひかとなむ(悪い夢を見ているようです)。さりとも(それでも)、年月隔てたまはじと(そんなに永くは都を離れ為さるまいと)、思ひやりきこえさするにも(拝察仕り申しますが)、罪深き身のみこそ(怨みに身を任せた罪深い私は)、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ(また御目に掛かるのは遠い日の事に為るでしょう)。

浮き布刈る伊勢をの海人を思ひやれ、藻塩垂るてふ須磨の浦にて (和歌 12-25)

伊勢でも海人は憂き目がち、塩垂る須磨の浦に似て (意識 12-25)

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも(何を見ても乱れている昨今の世情は)、なほいかになり果つべきにか(この先如何為ってしまうのでしょうか)」と多かり(と色々な事が書いてありました)。

「伊勢島や潮干の潟に漁りても、いふかひなきは我が身なりけり」(和歌 12-26)

「伊勢志摩こそその潮干狩り、貝しょう無しで泣くばかり」(意識 12-26)

ものをあはれと思しけるままに(源氏の不遇を嘆きなさって)、うち置きうち置き書きたまへる(一つ書いてはまた思いが繋がって)、白き唐の紙、四、五枚ばかりを巻き続けて、墨つきなど見所あり(長文でもあり墨の色合いも見事でした)。

「あはれに思ひきこえし人をお慕い申していた人を)、ひとふし憂しと思ひきこえし(その怨霊に嫌気を覚え申した)心あやまりに(心無さに)、かの御息所も思ひ倦じて(おもいうんじて、落胆なさって)別れたまひにし(都を後に為さったのだろう)」と思せば(と御思いになると)、今にいとほしう(自分も都を去った源氏は今では心苦しく)かたじけなきものに思ひきこえたまふ(思い遣りが至らなかったと感じ致しなさいます)。

折からの御文(そう思っていた所に在った御息所のお手紙なので)、いとあはれなれば(源氏はとても感じ入って)、御使さへむつまじうて(御使者さえ懐かしく御思いになって)、二、三日据ゑさせたまひて(御引止めさせなされて)、かしこの物語などせさせて聞こしめす(御息所の様子などを話させて御聞きに為りました)。

若やかにけしきある侍の人なりけり(御使者は若々しく礼儀を弁えた侍所の侍従でした)。かくあはれなる御住まひなれば(こうした簡素な御住まいでしたので)、かやうの人も(この御使者も)おのづからもの遠からで(自然と間近に)、ほの見たてまつる御さま、容貌を(微かではあったが拝し奉る源氏の御姿に御顔を)、いみじうめでたし(何と素晴らしい)、と涙落しをりけり(と感激していました)。

御返り書きたまふ(源氏は御返事をお書きに為ります)、言の葉、思ひやるべし(その文言はどんなに心が込もって居た事でしょう)。「かく世を離るべき身と(自分もこの様に都を離れる身と)、

思ひたまへましかば(知っておりましたなら)、同じくは慕ひきこえましものを(一緒に後を追えばよかったものを)、などなむ(などと思っております)。つれづれと、心細きままに、

伊勢人の波の上漕ぐ小舟(をぶね)にも、うきめは刈らで乗らましものを (和歌 12-27)

伊勢人の漕ぐ小舟なら、波に濡れずに済むものを (意識 12-27)

海人が積む投げ木のなかに塩垂れて、いつまで須磨の浦に眺めむ (和歌 12-28)

海人まで嘆き暮らさせる、しがない須磨の塩造り (意識 12-28)

聞こえさせむことの(御目に掛かって直に御話しできるのが)、いつともはべらぬこそ(何時になるのかは分かりませんが)、尽きせぬ心地しはべれ(ずっと思っています)」などぞありける(などとありました)。かやうに、いづこにもおぼつかかなからず(どちらへも心配りを怠らず)聞こえかはしたまふ(手紙を交わしなさいます)。

花散里も、悲しと思しけるままに書き集めたまへる(花散里からも悲しんで遣された姉妹の御手紙の)\*御心、御心見たまふ(其々のお気持ちを御覧に為って)、をかしきも目なれぬ心地して(その違いが面白く御二人同時というのも珍しく思えて)、いづれもうち見つつ慰めたまへど(どちらを見ても慰めなされましたが)、もの思ひのもよほしぐさなめり(同時に物思いを催す種でした)。\*「御心(みこころ)、御心」とは姉の麗景殿女御と妹の三の君との御二人の御気持ち、との事。

「荒れまさる軒のしのぶを眺めつつ、しげくも露のかかる袖かな」(和歌 12-29)

「荒れに任せる忍びなさ、露気ばかりの頼りなさ」(意識 12-29)

\*注に<花散里の贈歌。「偲ぶ」と「忍(草)」、「長雨」と「眺め」の掛詞。「忍(草)」と「露」は縁語。「軒の忍(草)」は荒廃した邸を象徴し、「露」は「涙」を連想させる。>とある。また訳文は「荒れて行く軒の忍ぶ草を眺めていると、ひどく涙の露に濡れる袖ですこと」とある。女暮らしの弱々しさが押し付けがましい。

とあるを、「げに(どうやら)、\*葎(むぐら、雑草)よりほかの(以外に)後見(うしろみ、頼り)もなきさまにておはすらむ(ない御様子らしい)」と思しやりて(と思ひ遣りなさって)、「長雨に(梅雨の時期になって)築地(ついち、土壁が)所々崩れてなむ」と聞きたまへば、京の家司のもとに仰せつかはして、近き国々の御荘の者(みしゃうのもの、荘園人夫)などもよほさせて(などを動員させて)、仕うまつるべき由のたまはず(修理させるように命じられました)。\*この<雑草が頼りになる>かのような妙な表現については<源氏の心中。『集成』は「葎が門を閉ざすという表現が和歌にあり、それが用心堅固だという気持で「後見」という」と注す。>と注にある。

[第四段 朧月夜尚侍参内する]

尚侍の君は(かみのきみは)、\*人笑へに(世間の物笑いになっているのを)いみじう思し(ひどく恥じて)くづほるるを(塞ぎこんで御出でなのを)、大臣いとかなしうしたまふ君にて(父大臣がとても可愛がっておいでの姫なので)、せちに(切に)、宮にも内裏にも奏したまひければ(太后にも



帝にも寛大な処分を願ひ上げ申し為されたことから)、 \*注に、右大臣家の六姫はく源氏との関係が世間に知られて参内停止になっている。>とある。

「\*限りある女御、御息所にもおはせず(六姫は女御や御息所といった正式の妃では無く)、公ぎまの宮仕へ(尚侍という役職での宮仕えの身分なのだから)」と思し直り(と帝は御考え直しなさり)、 \*注にく「限りある」とは、帝の後宮の後妃の一人としての意。尚侍は妃ではなく公職の人なのだという帝の心意を語る文。>とある。六姫が尚侍(ないしのかみ、秘書室長)という設定のギリギリ感は当初から在るが、正に其の明示なのだろう。

また、「\*かの憎かりしゆゑこそ(相手の源氏が赦し難かったので)、いかめしきことも出で来しか(六姫の出仕を厳禁として来たのだが、源氏が須磨へ自主退去した今となつては参内を停止している意味は無い)」。 \*注にく源氏との一件から参内停止という処置をとつたのだが。「こそ一出で来しか」係結び、逆接用法。連用中止で、下に、源氏が退去した今となつては、朧月夜一人に辛く当たる必要はない、という意が省略。>とある。

許されたまひて(ということで、赦免されなさつて)、参りたまふべきにつけても(参内なさる事にはなりましたが)、なほ心に染みにし方ぞ(いまだに心底惚れた源氏のことが)、あはれにおぼえたまける(ああ愛しいお方と忘れられずに居たのです)。

七月(文月ふづき、初秋)になりて参りたまふ。いみじかりし御思ひの名残なれば(帝は逢いたくしょうがない姫にやっと逢えたので)、人のそしりもしろしめされず(他の妃の手前も憚らず)、例の(以前のように)、主上につとさぶらはせたまひて(側にずっと寄り添わせ為されて)、よろづに怨み(弟と縁りを戻して情を受け入れてしまった姫のボコを、こうしたらどうなるのだと搔き回し舐め回し)、かつは\*あはれに(姫には自分の熱いデコを握らせて、ああ我は是程に猛っていると)契らせたまふ(深い思いをお知らせになりました)。 \*「あはれに契らせ賜ふ」という表現を当時の人が如何受け止めたのかは良く分からない。ただ理屈で考えると、この物語での「契る」という言葉にはく約束する>という一般契約概念ではなく、仏教思想での前世に於ける定めを現世に於いて果たす又は確認するという事を底意に、其の思いを来世に引き継ぐ為にく性交する>という意味合いを強く感じる。一面では個体生理である「性交」に組織概念の意味づけを求めるのはヒトの特性で、子育てについては実質で当事者同士の人間関係が生活基盤と成る事は事実である。「好きもの」を讃える重要性もこの時代だけの事では無いが、腹違いとはいえ母後の妹君である六姫は帝の叔母には違いない筈で、階級意識と同族意識がほぼ等しい社会構造において、近親婚がその劣性遺伝の低生産性を消極的に考えるよりも、むしろ相応しい範囲内の相手と積極的に見做される事に、此処での「契り」の現実的意味が垣間見れる。その「性交」を「あはれに」するのだから、其れは相当にイヤラシク、趣深いものだったに違いない。具体的な性戯について、当時の読者が何を思い描き、どう感じたのかは知る由も無いが、言い換えには文意のイヤラシサは汲むべきなのだろう。

御さま容貌もいとなまめかしうきよらなれど(帝は御姿御顔立ち共にとても優雅で美しかったが)、思ひ出づることのみ多かる心のうちぞ(その帝を前にして六姫は源氏の思い出ばかりを胸に描いていたとは)、かたじけなき(畏れ多い事でした)。

御遊びのついでに(帝は侍女たちに管絃を演奏させながら)、「その人のなきこそ(光君が居ないというのは)、いとさうざうしけれ(実に物足りない)。いかにまして(一体どれほど)さ思ふ人多からむ(そう思う人は多いことだろうか)。何ごとも光なき心地するかな(何事にも光がなくて精彩を欠く気分がするな)」とのたまはせて(と仰って)、「院の思しのたまはせし御心を違へつるかな(光君を重用しないで院の御遺言に背いてしまった)。罪得らむかし(私はきっと罰を受ける事に為るだろう)」とて、涙ぐませたまふに(といて涙ぐまれたので)、え念じたまはず(六姫も涙を堪え切れませんでした)。

「世の中こそ、あるにつけても(生きていても)あぢきなきものなりけれ(味気ないものだ)、と思ひ知るままに(と思ひながら)、久しく世にあらむものとなむ(いつまでも生きて居たいとは)、さらに思はぬ(少しも思わない)。さもなりなむに(私が死んだら)、いかが思さるべき(貴女は如何御思いに為るのでしょう)。近きほどの別れに(今度の光君との別れよりも)思ひ落とされむこそ(悲しんでくれないとしたら)、ねたけれ(憎らしいですね)。『\*生ける世に』とは(古歌にある『生きていてこそ』などと言うのは)、げに、よからぬ人の言ひ置きけむ(実に物を知らぬ人の言ひ草だ)」 \*注に<『源氏釈』は「恋ひ死なむ後は何せむ{恋に死んで何になる}生ける日のためこそ人の見まくほしけれ{生きていてこそ逢いたくと言うのに}」(拾遺集恋一、六八五、大伴百世)を引歌として指摘する。『集成』は「あなたの心は源氏のことといっばいだから、「生きているこの世で」と思っても、何にもならぬことなのだ、古歌は私のような場合のあることを知らないのだ、の意」と注す。({は我訳}>とある。此処の段落での朱雀帝の六姫に対する執心ぶりは、源氏の引き立て役という位置づけではなく、三者三様の主体描写で興味深い。

と、いとなつかしき御さまにて(帝はまるで源氏と仲が良かった若い時のような調子で)、ものをまことにあはれと思し入りてのたまはするにつけて(本当に懐かしそうに仰るので)、ほろほろとこぼれ出づれば(六姫が涙を溢れさせなされると)、「さりや。いづれに落つるにか(おや、その涙はどっちを思ってかな)」とのたまはず(と帝は仰います)。

「今まで御子たちのなきこそ(今まで世継の子を儲けていない事が)、さうざうしけれ(どうも落ち着かない)。春宮を院ののたまはせしさまに思へど(春宮を院の御遺言通りに次帝にする心算だが)、よからぬことども出で来れば(邪魔する者が出て来れば)、\*心苦しう(気詰まりに為るだろう)」など、世を御心のほかに(治世を帝のお気持ちとは違って)まつりごちなしたまふ人びとのあるに(取り仕切りなされる摂関家に)、若き御心の、強きところなきほどにて(帝は経験不足で押し切れない所があつて)、いとほしと思したることも多かり(無念に御思いになることも多かったのです)。 \*興味深い記述。兄帝も六姫も紛れも無い大后の縁者だが、同時に相当程度は源氏の縁者でもある、という確認だろうか。